

ばか苗病

1 病徴

本病は育苗期に発生し、罹病すると出芽後間もない苗が枯死することもあるが、典型的な病徴は育苗の中～後期に現れる葉鞘および葉身の徒長、葉色の黄化である。罹病苗を抜き取ると、苗の基部や籾の周囲に白色ないし紅色のかびが生え、組織が紫褐変していることがある。

2 発生生態

本病は種子伝染性の病害であり、発病ほ場からの採種や自家採種の繰り返しにより発病する。発病苗は本田に移植してもほとんど枯死するが、一部は生き残り伝染源となる。出穂期以降の本田に発病株が存在すると、下位の葉鞘にピンク色の胞子を多量に形成し（写真2）、その胞子を数百メートルの範囲に飛散させる。この胞子が開花中の穎花の中に入り込み、柱頭や雄ずいから侵入し、菌糸が胚に達すると、籾はしいなになる。穎の表面などに付着した胞子は表皮内へ侵入し、罹病籾や汚染籾を発生させ、翌年の伝染源になる。

3 防除方法

優良種子の利用と薬剤による防除を励行する。種籾は無病のほ場から採種したものを用いるか、優良種子への更新を行う。適切な比重で塩水選を行い、罹病籾を除去する。塩水選後は、種子消毒を行う。なお、本病は温湯種子消毒によっても防除可能である。本県では、種子消毒により発生はほとんどないが、未消毒種子を使用しているほ場で発生が目立つ。

苗箱や本田において伝染源となる発病株を抜き取る。特に採種用の水田が約 500 メートル以内にある場合は、早期から発病株を抜き取り、地域全体で発生が見られないことを目指す。



写真1 本田内のばか苗病罹病株



写真2 下位葉鞘に形成された胞子